長南岩陰墓(H25)出土の虺龍文鏡

久貝弥嗣

はじめに

長南岩陰墓(H25)は、2013(平成 25)年度の長南地区のほ場整備工事に際して新規に発見された遺跡である。2012(平成 24)年度にも、同地区での岩陰墓が 1 基調査されており、この時の岩陰墓を長南岩陰墓(H24)として区別している。両年度の岩陰墓の発掘調査成果については、すでに 2015 年 3 月に報告書が刊行されている(宮古島市教育委員会 2015)。今回長南岩陰墓(H25)の墓 1 より出土した鏡について、沖縄県立埋蔵文化財センターの山本正昭氏より新たな知見がえられた。本論では、その新たな知見とともに、類例資料として那覇市ナーチュー毛古墓で出土の鏡との比較検討を行っていきたい。

１．長南岩陰墓(H25)の概要

長南岩陰墓(H25)は、長南公民館の西方約 20m の場所に位置し、2 基の岩陰墓から構成される。今回報告を行う鏡の出土した墓は、墓 1 である。

墓 1 は、琉球石灰岩の自然の岩陰を利用した岩陰墓で、墓口の幅は約 1.2m、高さ約 0.8m、奥行き約 0.6m の比較的小規模な規格を呈している。墓内の堆積層は、しまりの弱い褐色土で、層厚は約 0.3m の 1 層からなる。本層からは、全体で 6 点の遺物が出土しているが、人骨の出土はなく、すでに移転済みの状況であった。

出土遺物としては、福建・広東系の青花碗が 1 点、沖縄産施釉陶器の灰釉碗が 3 点、沖縄産無釉陶器の壺と考えられる胴部、底部が各 1 点、土器の瓶の口縁部が 1 点、鏡 1 点の内訳となる。この内、青花碗は、外面に菊花文を有し、内底が露胎しており、墓 1 では数少ない年代の指標となる陶磁器で、18 世紀～19 世紀に位置づけられる。灰釉碗についても概ねこの年代に近い時期の遺物として捉えることができる。墓内の出土遺物については、伝製品を副葬することも想定されるが、遺物の年代観は、18 世紀～19 世紀を年代の主体においているといえる。

２．ナーチュー毛古墓群の概要

ナーチュー毛古墓群は、那覇市天久(小字は水溜原・後原)と安謝(小字は前東原・前原)にまたがる位置に所在する。那覇新都心のほぼ中央、標高約 45.5m を頂点とする琉球石灰岩丘陵の斜面を利用した古墓である(那覇市 2000)。古墓は、第 1 号～49 号までで構成され、那覇

市教育委員会によって 1993 年から 1994 年まで発掘調査が実施され、2000 年に報告書が刊行されている。

今回報告を行う鏡が出土したのは、第 39 号墓である。39 号墓は、銘書と家譜資料の比較研究から、読谷山王子朝苗を一世とする「玉川御殿(尚清王八男)の直系」(向氏)の墓であることが報告されている。その他の墓についても、40 号墓が欽氏米須家の墓であり、34 号墓が蘓氏上運天家の墓、18 号墓が蘓氏棚原家の墓、37 号墓が欽氏濱元家の墓に比定されており、ナーチュー毛古墓群が、首里系、那覇系士族の墓であったと考えられている。

39 号墓の形態は、琉球石灰岩を掘り込んだ堀込墓で、墓室が 2 重構造になり、戦時中には、奥室が改変されている。出土遺物としては、石製家形や陶製家形などの蔵骨器が 380 点出土するほか、青磁香炉 1 点、青花皿 1 点、円盤状製品 1 点、銭貨 3 点(寛永通宝・古 1 点、皇宋通宝が 1 点、無文銭 1 点)、煙管 5 点(金属製吸口 3 点、沖縄産施釉陶器製吸口 1 点、沖縄産無釉陶器雁首 1 点)、簪 1 点(男副簪)である。鏡は、本報告を行う鏡のほかに、もう 1 点柄付きの蓬莱鏡が 1 点出土しており、「天下一川嶋」の銘がみられる。

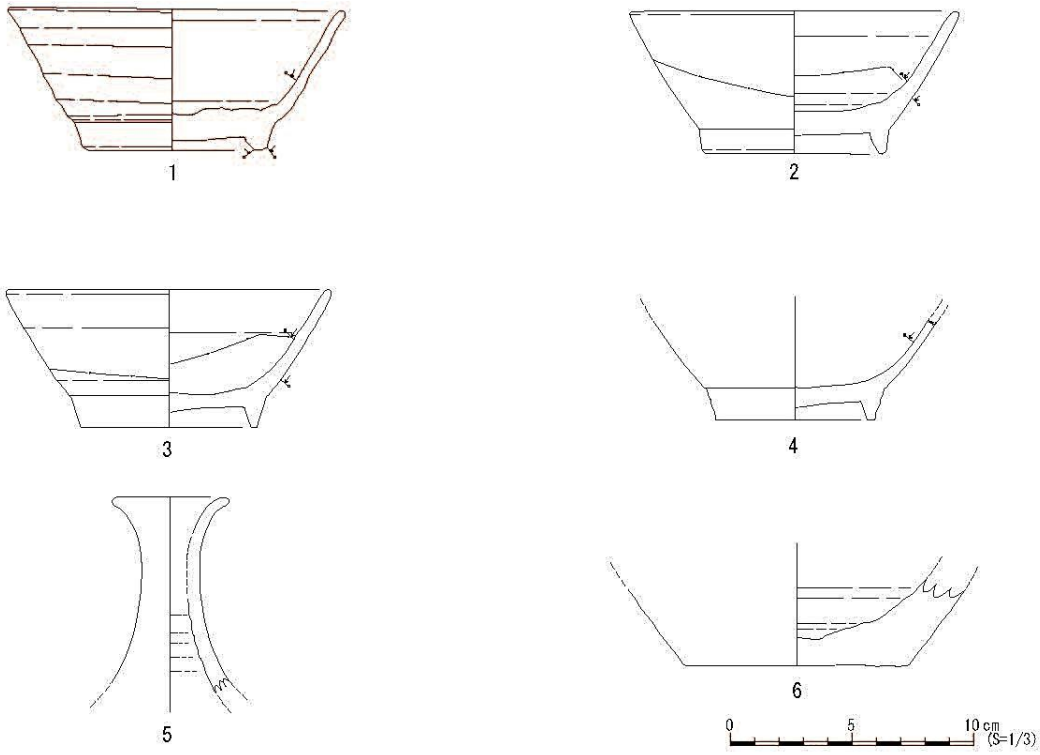

図 1　長南岩陰墓(H25)墓 1 出土の遺物

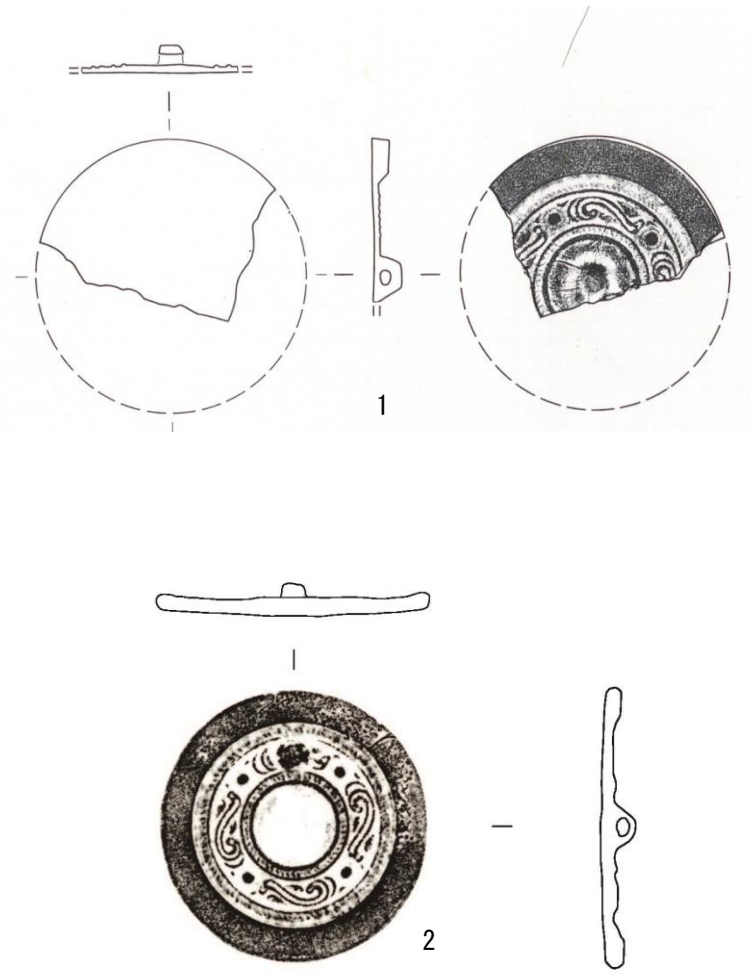

図２　虺龍文鏡(1：ナーチュー毛、2：長南岩陰墓(H25))　S=1/2

３．鏡に関する検討

まず、両遺跡から出土する鏡の規格について確認してみたい。

ナーチュー毛出土の鏡の観察事項として、「鏡部分の推定径は 7.15 ㎝、紐座 1.2 ㎝、紐高 0.6 ㎝、重量 50.0g。鏡背には界圏が 3 つみられ、紐に最も近い界圏内は無文だが、その他の界圏内には文様がみられる。」とある。また、久保智康氏による金工品調査において「銅、鋳造、漢代の虺龍文鏡(注 1)の踏み返し鏡。背面、側面は青味を含む黒色。鏡面は、占用。文様全体に不鮮明。紐は幅広の山形で、頂部が平坦となる。紐孔は、断面隅丸方形。」とある。

一方、長南岩陰墓(H25)出土の鏡は、直径が、7.2 ㎝である。また、紐座についても 1.2 ㎝、

写真１　ナーチュー毛古墓出土鏡(左)と長南岩陰墓(H25)出土鏡

写真２　背面部

写真３　ナーチュー毛出土鏡の外縁部

写真４　ナーチュー毛出土鏡の虺龍文

写真５　長南岩陰墓(H25)出土鏡の虺龍文

紐高 0.6 ㎝と、両遺跡出土の鏡の規格は全く同一であるといえる。重量については、長南岩陰墓(H25)出土の鏡は、320g である。文様の形態としては、2 つの同心円で区画された間に虺龍文が施されている。2 つの同心円内には斜線の文が密に施されている。区画内には、4 つの突起が方形の 4 つ角にくるように配置され、その 4 つの突起の間に虺龍文が施される。そのため、虺龍文も 4 つ配置されることとなる。しかし、4 つの突起で区画された内の 1 つの区画には、虺龍文の中央部に直径が3㎜ほどの4つの突起よりも大きい突起が配置されている。そのため、その部分の虺龍文は、中央部に突起が位置し、文様が明確ではない。

遺跡内出土の虺龍文鏡としてよく知られているのは、佐賀県三津永田遺跡出土のキ龍文鏡で、佐賀県の重要文化財(考古資料)に指定されている鏡である。三津永田遺跡出土のキ龍文鏡は、昭和 28 年の調査で、弥生時代後期初頭の 115 甕棺墓から出土しており、径 9.2㎝ で鏡面はやや反るとされている。文様の構成は、類似するが、各虺龍文には鳥の文様が 1 対あり、県内出土の虺龍文鏡は、鳥の文様部分が簡略化したものと考えられる。また、ナーチュー毛出土の鏡については、破片であるため明確ではないが、長南岩陰墓(H25)出土の鏡には、4 つの突起のほかにやや大型の突起がみられる。この大型の突起については、三津永田遺跡出土のキ龍文鏡にはみられないものである。また、鏡の直径についても、長南岩陰墓(H25)とナーチュー毛出土の鏡は三津永田遺跡出土の虺龍文鏡に比べ約 2 ㎝小型であることもみてとれる。

もう一点、ナーチュー毛出土の鏡の長南岩陰墓(H25)出土の鏡にも、相違点もみられる。長南岩陰墓(H25)出土の鏡の外縁部は、非常に丸みをおびているのに対し、ナーチュー毛出土の鏡の外縁部は、非常に角が立った状態にある。この点については、使用に伴う 2 次的な要因に伴うものかは判然としないが、長南岩陰墓(H25)出土の鏡の外縁部は、非常に滑らかな丸みを帯びている。

４．まとめ

三津永田遺跡の虺龍文鏡の出土状況にみられるように、虺龍文鏡は、本来漢代の鏡である。長南岩陰墓(H25)は、共伴する出土遺物や墓の形態などからも 18 世紀～19 世紀代に位置づけられる墓であり、同様の観点からナーチュー毛第 39 号墓についても、概ね 16 世紀以降の墓であるといえる。この点については、明確な時期差を有するものである。また、久保氏の指摘するように踏み返し鏡であるといえる。

では、なぜこのような鏡が 2 つの遺跡から出土しているのだろうか。ナーチュー毛の第 39 号墓は、銘書きにもあるように王府につながりのある首里士族であり、有力士族であるならば、虺龍文鏡が伝世していた可能性も少なくはないと考える。しかしながら、長南岩陰墓(H25)の墓 1 は、周辺の岩陰墓と同様の形態をなしていることから、墓 1 に特異性は感じられず、

伝世の可能性も低いように考えられる。発掘調査時に、墓の所有者についての聞き取りも行われているが、所有者不在の無縁墓として発掘調査が実施されている。

宮古島市において、伝世品の鏡の事例としては、宮古島市総合博物館収蔵忠導氏仲宗根家関連資料の白銅鏡(大)(注2)と、白銅鏡(小)(注3)の2点を確認することができる。しかし、いずれも柄付きの和鏡であり、中国鏡の伝世資料は確認されておらず、宮古島市内の発掘調査で中国鏡が出土した事例も認められない。県内で確認されている中国鏡としては、沖縄県立博物館・美術館収蔵の素文鏡(県内)、崎山御嶽遺跡出土の重圏鏡片(那覇市)、銘苅古墓群出土の鏡片2点(那覇市)などが報告されている（久保 1998)。宮古島市内では、中国鏡の伝世品や出土状況に類例がないことから、現段階において長南岩陰墓(H25)の墓1から虺龍文鏡が出土した歴史的な経緯を推し量ることは困難である。

しかし、ナーチュー毛出土の鏡と比較した場合、同一規格で、同一文様の構成をなしている点は、同じ踏み返し鏡の可能性が考えられる。しかし、その後の使用方法として、長南岩陰墓(H25)の墓1の鏡は、外縁部が丸みをおびるほど使用した可能性が高くみられる一方で、ナーチュー毛出土の鏡は、使用頻度も少なく、外縁部のエッジが明瞭に残されている。この相違が使用方法によるものなのかも推測の域をでないが、一つの大きな特徴といえる。

本論では、長南岩陰墓(H25)墓1出土の虺龍文鏡について、ナーチュー毛出土の類例資料との比較を行ってきた。沖縄県内における虺龍文鏡の出土がこの2例のみに限られるため、鏡の出土する墓の意義や、銅の成分調査、16世紀以降の踏み返し鏡の生産や消費などの社会背景にまでは踏み込みことができなかった。今後も類例資料の増加に期待をこめるとともに、墓から出土する鏡などの金工品について整理、調査を深めていきたいと考える。

謝辞

ナーチュー毛出土の鏡の実見にあたっては、那覇市教育委員会の仲宗根啓氏に対応いただき、同遺跡の性格及び墓の概要についてご教示いただきました。また、沖縄県立埋蔵文化財センターの山本正昭氏には、今回の比較検討に伴う知見をいただいたほか、ナーチュー毛出土資料の実見に際してもご同行いただき種々のご指導をいただきました。両氏に記して感謝申し上げます。長南岩陰墓(H25)出土の虺龍文鏡の実測、拓本、トレースについては、文化財資料室資料整理作業員（高橋さん、草浦さん、平安山さん）にご協力頂きました。

【注釈】

注1：大辞林によれば、キ龍文(虺竜文)とは、「中国、殷周時代の青銅器に用いられた文様。向き合った一対の蛇を並べるもの。」とされている。

注 2：資料番号は H-23。鏡径 23.2 ㎝、長さ 33.1 ㎝。「藤原吉長」の銘有り。

注 3：資料番号は H-24。鏡径 17.5 ㎝、長さ 27.0 ㎝。「天下一木□村因幡守藤原吉次」の銘有り。

注 4：長南岩陰墓(H25)墓 1 出土遺物については、報告書内で写真のみでの報告であったため、今回改めて久貝が実測を行った。

【参考文献】

・那覇市教育委員会 2000 年 『ナーチュー毛古墓群』那覇市文化財調査報告書第 44 集

・宮古島市教育委員会 2015 年 『長南岩陰墓・長南陣地壕・地盛南岩陰墓・地盛南陣地壕・村越陣地壕群』宮古島市文化財調査報告書第 5 集